

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
00-001	殷墟期から殷末周初期にかけての青銅彝器生産の動態		
	中国	中国社会科学院	
	難波純子	天理大学文学部	非常勤講師

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

私はかねてから日本の文化の起源として重要な中国の殷周青銅器の編年研究を行ってきたが、青銅器自体の型式学的研究による成果と、発掘資料の照合のうえでどうしても矛盾を解決しえない問題があった。それは、開始期と、殷末周初すなわち殷周革命前後の青銅器の編年に関する問題であった。ところが、近年河南省安陽市殷墟の東北部において、従来の認識より古い城壁都市が発見され、殷墟に都をおく殷墟期よりも古いという説が、調査に当たった社会科学院安陽工作隊長の唐際根氏によって提起された。この考え方は私の青銅器編年と合致するものであったので、唐氏と合作論文を共同執筆して該期の土器編年と青銅器編年を照合させ、さらに遷都に関する史実記載と対照させることにより、「中商文化」という新しい時期概念を提出するに至った。こうして、とりあえず殷墟の開始期の編年に関する疑念を晴らすことができたが同時に私のより新しい時期の青銅器編年の分期案を見直す必要性が生じてきた。加えて、殷墟の編年の指標となる土器や甲骨文字は、近年の発掘新資料によって新しい研究成果が提出されつつある状況である。こうしたことから、私は殷墟の青銅器、そして従来は報告書の上でしかみることのできなかつた土器その他青銅器と共伴する遺物の原資料を手にとりて自ら観察し、その編年の妥当性を再度検討しつつ、青銅器編年との徹底的な照合作業をおこないたいと切に希望するようになった。

この作業は同時にもうひとつの課題、殷末周初の青銅器に関する諸問題を解く鍵をも握っている。青銅器の編年上、殷・周それぞれの時期の青銅器には異なる特徴がみられることは漠然と認識されてきたが、近年、各地での発掘調査が進んだ結果、殷墟期後半には、周の本拠地陝西省関中地区を中心に先周文化が興隆していたことが明らかになっている。そして、殷周革命は文化の中心地の交代として捉えられる、と認識が改めつつある。しかしながら、該期の青銅器については、出土地が広範囲にわたり集成し難いことや、青銅器のあまりにも多様な要素の整理がつかないことなどから、両者を区別する明瞭な回答は得られていない。私は王都殷墟の青銅器の編年をさまざまな要素を指標におこなう一方で、中商期以来各地で展開する地方型青銅器についても少しずつ分析を進めているところである。今回、殷墟での終末期の青銅器を検討するかたわら、関中地区をはじめとする地方製青銅器をつぶさに観察し、紋様・鑄造技法など実物を観察しなければわからない情報を集約して、青銅器研究の重要課題である殷末周初の青銅器の動態を明確にすることをもうひとつの目標としたいと考えている。

なお、中国の学会に参加した折に知り合った、文革後教育を受けた世代の研究者は、老学者と異なり、海外の研究者に協力的であるとともに、共同研究にも積極的である。この若い世代のがくしゃが、各地の文化財調査施設の責任者として活躍し始めた現在は、現地の資料を実際に観察する必要がある私の研究にとって逃すことのできない絶好のチャンスであると認識している。

成果報告書

助成番号 00 - 001

氏名 難波 純子	留学先国名 中華人民共和国	機関名 中国社会科学院考古研究所
アジアスカラシップによる中国留学成果報告 題目「殷末周初青銅器生産の動態」		
1. 研究目的		
a. 着眼点		
1) 殷墟出土品の研究		
最近の青銅器の編年研究は少しずつ進展しつつあるが、まだまだ未解決の問題点も多い。その中でも最も難解でしかも興味深い問題は殷墟期の青銅器と武王が殷を滅ぼした後の西周初期の青銅器とを鑑別することである。一般的な理解では、殷墟で発見された青銅器が殷墟期のものであり、周の故地(すなわち関中)で発見された青銅器が西周以降のものであるという曖昧な考え方が横行しているようである。しかし、両地域では何の差異も見られない青銅器もそれぞれ発見されている。だから、両時期の青銅器の編年、区分はやはりはっきりとはしていない状況にあるのである。そこで、研究を進めるために私は次のような計画を立てた。		
殷墟出土遺物によって、土器編年、青銅器編年、甲骨編年の三つを相互に比較対照させ、詳細な編年案を作り上げる。商末周初の編年研究を進めるためには、晩商三～四期の土器と青銅器の編年について理解を深める必要がある。特に自らここ 20 年来の間に発見された中小型墓の青銅器と土器とを実際に観察することにより、これまで公表されてきた編年案を検証してゆくことが重要である。		
2) 地方出土青銅器について		
最近の一般的な理解では、晩商時期に関中地区にはすでに一つの文化の第2中心地とでもいうものができあがっていたと考えられている。よって、私は関中地区の青銅器を中心とする資料を収集し、各地に赴いて数多くの青銅器を見学、観察してそれぞれの特徴を把握し、地方出土青銅器の実際的な状況を明らかにしたいと考えた。そして最後に殷墟末期の青銅器の状況と比較検討して総合し、商末周初の青銅器生産の動態について研究する。		
b. 研究日程		
上述の計画にしたがって、中国各地に見学旅行を行い、青銅器を実際に観察して回った。なお、その際には中国社会科学院考古研究所の同僚や、各地各機関の幹部と研究員の方々、とりわけ考古研究所の科研処のご助力を賜った。		
2001年 4月 4日 北京着		
4,5,6月中 北京市内の博物館所蔵の青銅器見学		
北京大学サックラー記念芸術博物館(周原青銅器名品展を開催中)・保利芸術博物館、首都博物館、房山県琉璃河博物館		
7月 10-14日 河南省安陽市 中国社会科学院考古研究所安陽工作站にて殷墟新発見資料の予備調査		
15日 同鄭州市 河南博物院見学		
28-29日 天津市		
8月 4-11日 安陽市 安陽工作站にて青銅器の観察、資料収集(郭家庄 M160)		
16日-9月 1日 安陽市 安陽工作站にて孝民屯鑄造遺跡出土青銅器鑄型の調査と資料化、涇北商城ボーリング調査に参加		
9月 27日-10月 9日 安陽市 安陽工作站にて青銅器の調査と資料収集(郭家庄墓地、劉家庄 M1046)		
10月 17-18日 山西省太原市 山西省博物館、山西省文物考古研究所にて山西省出土青銅器の調査と資料収集		
同 19日 山西省侯馬市 山西省文物考古研究所侯馬工作站にて侯馬鑄銅遺跡出土鑄型・侯馬市内各遺跡出土の青銅器と土器を見学		
同 20-23、27日 陝西省西安市 中国社会科学院考古研究所西安研究室、陝西省博物館、西北大学文博学院資料室、臨潼県博物館、始皇帝陵、兵馬傭博物館を見学。		

- 同 24-25 日 陝西省宝鸡市 宝鸡青銅器博物館にて魚国墓地出土青銅器を見学、魚国墓地の遺跡を見学
 同 26 日 陝西省扶風県 社会科学院考古研究所周原工作站、扶風県博物館にて周原出土遺物を見学
 11 月 3-4 日 湖北省武漢市 湖北省文物考古研究所にて湖北省出土青銅器を調査、湖北省博物館見学
 同 5-6 日 湖南省長沙市 湖南省文物考古研究所、湖南省博物館、長沙市博物館にて湖南省出土青銅器の調査
 同 7 日 湖南省寧郷県 劉少奇紀念館内の寧郷出土青銅器陳列室にて調査
 同 14-17 日 山東省曲阜市 社会科学院考古研究所の山東省工作站、曲阜孔子博物館にて山東省出土青銅器の調査、曲阜古城遺跡の見学
 12 月 18-20 日 安陽市 洹北商城発掘現場の見学
 2002 年 1 月 14-20 日 安陽市 安陽工作站にて青銅器の調査(花園庄 M54、M60)
 同 17-18 日 鄭州市 河南省文物考古研究所、同研究所鄭州商城工作站、鄭州市文物研究所、にて鄭州市出土青銅器の調査、新鄭県 河南省文物考古研究所新鄭県工作站、新鄭県博物館にて新鄭県出土青銅器の調査
 同 21 日 武漢市 湖北省文物考古研究所にて青銅器調査
 同 22 日 湖北省荊州市 荊州市博物館見学
 2 月 24-26 日 上海市 上海博物館見学
 同 27 日 江西省南昌市 江西省文物考古研究所にて青銅器など調査、江西省博物館見学
 同 28 日 安徽省合肥市 安徽省博物館見学
 3 月 1-3 日 江蘇省南京市 南京博物館見学
 3 月 15-18 日 香港 古董街にて青銅器調査

2. 安陽出土「商末」青銅器の変遷

安陽には最も長い期間滞在し、過去に殷墟で出土した青銅器の考察を進め、また資料収集に努めた。それは観察記録をつけたばかりでなく、写真(含デジカメ写真)、拓本、実測図の作成を含む。商末周初の青銅器を理解する上では殷墟後半の青銅器の編年について研究することは不可欠である。よって、安陽では全部で一ヶ月半を費やしてこの時期の青銅器の情報収集に努めたのである。現在、収集した資料をもとに考察を進めている途中であるが、いくつかの紋様や青銅器形態の発達過程について明らかにした。

従来の私の青銅器の紋様の種類についての研究によると、殷墟では中商期に始まるいくつかの紋様の系統がある。すなわち粗線饕餮紋、細線饕餮紋、輪郭饕餮紋などを代表とするいくつかの表現方法である。殷墟三期にいたると、細線饕餮紋、輪郭饕餮紋、粗線饕餮紋などの後続系統にあたる平面的な紋様が依然として爵や觚、またこの時期一般的となった觚形尊などの青銅器上に用いられている。しかし、紋様帯の幅は少しずつ狭まり、紋様各部分も退化して粗雑になる。伝統的な平面的紋様以外に散開饕餮紋が簡略化して平面化した紋様が始まる。一方で伝統的紋様が継続的な変化を遂げて成立した紋様以外に、斬新な紋様が新たに始まる。そしてその中でも鳥紋の地位が比較的高くなるのがこの時期、初めて認められる。

この時期に比較的流行した卣、觚形尊、簋、壘などの器種上には顔面饕餮紋が多用される。中でも C 字角顔面饕餮紋の例は最も多い。基本的に各器種上の顔面饕餮紋のデザインは同じであるが、角などの細部表現には器種ごとにある程度の差が見られる。このように、腹部に広幅の饕餮紋を飾る伝統的な青銅彝器の上でも、紋様上の差が生じるなど、多種多様化が始まるのである。

さらに、この時期には、以前と全く異なる装飾方法が出現する。それは平行する条紋をもって広い面積を充填する直条紋や、表面に矢羽状の V 字形の刻線を彫りこみ、断面形が三角形を呈する綾杉紋稜脊の出現などである。こうした新方式の装飾を採用した青銅器は伝統的な饕餮紋を用いず、鳥紋や大眉饕餮紋など新たに創造された紋様を一緒に用いている。

このように、殷墟後半期になると、青銅器上の装飾はもともとの単純明快な相互関係の上で理解することができなくなり、いくつかの系統の交流、収斂、分岐などの動向によって理解される関係上に発達したと見なければならぬ。そしてその状況とは非常に複雑である。

a. 細線饕餮紋から三段式饕餮紋への変化過程

細線饕餮紋は商代青銅器の伝統的紋様の一つである。その特徴は平面上に大小の渦により饕餮を表現することである。私は二里岡期(早商期)に始まり、少しずつ変化して西周期によくみられる三段式饕餮紋になったと考えて

いる。爵や觚の上に多く飾られる紋様であるので、西周期に至る三段式饗饗紋の変化について研究するためには、非常に適した例であるといえる。饗饗の各部分は少しずつ退化し、その上中下の部分の幅は徐々に均等になっていく。そして各部の簡略化された三段式饗饗紋が成立するのである。各段階の器形の研究によって「西周」様式といわれている爵は実は殷墟三～四期に属することになる。編年研究をさらに進めるためには各型式の出土地や出土した以降の状況などを踏まえてその他の青銅器の編年研究案とも比較し、確かなものにしてゆく必要がある。

b. 郭家庄遺跡、劉家庄遺跡の新出土商末周初青銅器の研究

1987年から1995年にかけて考古研究所安陽工作隊は安陽郭家庄遺跡で数多くの墓を発掘した。その中には、AGNM160のような晩商期の後半段階の良好な資料も含まれている。その発掘報告はすでに出版されているが、より理解を深めるために詳しい情報を得ることは不可欠である。楊錫璋先生のご助力のもと、これらの青銅器の拓本、実測図、写真を収集し、自ら製作した。こうして、殷墟三期の後半にすでに多くの斬新な様式の青銅器が鑄造されていたことがわかった。

そのほか、1999年に劉家庄で発見された未盗掘の墓、ALNM1046からは殷墟四期後半の青銅器の資料が多数出土した。供出した土器から、この墓が殷墟四期後半に相当することがわかったのである。出土した青銅器の中には「西周」様式の青銅器が多数含まれていた。こうした状況からみて、いわゆる「西周初期」の様式の青銅器が土器の編年上では実は「殷墟四期」後半に相当し、武王克商後のある段階においては殷墟の都市は依然として存続しており、伝統文化をとどめていたことが推測できる。この新しい見解はある学者の研究成果と一致するものである。

3. 安陽孝民屯の商末周初期の鑄型

a. 2000、2001年新発見の鑄型

2000年から2001年にかけて、社会科学院考古研究所安陽工作隊では再び孝民屯鑄銅遺跡において発掘調査を行ない、多くの青銅器鑄造鑄型を発見した。その中には非常に高度な青銅彝器の鑄型が含まれている。発掘された遺構は比較的大型の灰

坑ということであり、使用後の鑄型を廃棄するための廃棄坑であった可能性がある。供出した土器は「殷墟三期から殷墟四期」に相当するということであり、鑄型資料の中には爵(細線饗饗紋、輪郭饗饗紋、全面施紋、細帯夔龍紋)、觚(綾杉紋稜脊顧首龍紋、細線饗饗紋、散開饗饗紋)、鼎(大型顔面饗饗紋、顔面饗饗紋鬲鼎、扁足鼎)、簋(四不象形兩耳簋、直条紋方座簋、殷墟型方格乳釘紋、夔龍紋)、觶、觚形尊、大型直条紋禁、方彝、饗饗紋壘、などの鑄型がみられる。それらは器種が豊富ばかりでなく、典型的な商末周初の青銅器の鑄型が含まれていることが注目される。こうして、「商末周初」様式の青銅器は遅くとも殷墟四期後半に相当する時期のものであり、殷墟の孝民屯にあった鑄造工房において鑄造されたことが明らかとなったのである。

b. 1930年代スウェーデンのカールベック収集鑄型の再検討

1920年代以来、スウェーデン遠東博物館は中国古代の文物の収集に努めてきた。その中には、安陽出土の商代の文物も含まれている。2002年春に考古研究所の副研究員(助教授)唐際根氏がスウェーデンに招かれ、これらの遺物を実見する機会を得たのち、私にこれらの遺物についての紹介論文を書こうと持ちかけてきた。私もまた、遠東博物館所蔵の鑄型には大変興味があったので、合作に同意し、70年前にBMFEA(遠東博物館紀要)誌上に発表された鑄型について再検討することとした。

カールベックの記録によると、現在スウェーデン遠東博物館に所蔵されている鑄型は小屯村西方の小さな農村で出土したものという。しかし、私は以前はカールベックが収集したこれらの鑄型が孝民屯村で出土したものかどうか疑わしいと考えていた。なぜなら、1958～1960年に小屯村西方の孝民屯村で発掘された鑄型は主に武器、工具やあまり高級品ではない彝器の鑄型程度であったからである。しかし、今回、新出土の孝民屯鑄型を考察した結果、孝民屯ではカールベックが発表した鑄型とよく似た鑄型や、同時期の青銅器の鑄型が多数出土していることがわかった。よって、私はカールベックの記録が間違いではなく、孝民屯で出土した高級な彝器の鑄型であることに対する疑念がなくなった。

現在まだ安陽工作隊の発掘報告の正式発表が行われていないので、それを待たなければならないが、カールベ

ックが収集した鑄型の個々の観察記録や写真は、我々に十分孝民屯鑄造工房址がいわゆる商末周初の青銅彝器工房であることを再認識させてくれたといえよう。

4. 安陽以外の各地出土の「商末周初」青銅器

a. 中国各地出土の「商末周初」青銅器

事実上、中国各地ではいわゆる「商末周初」期にあたる青銅器が出土している。以前は一般的にこれらは中原から持ちこまれたものである、という漠然とした理解がなされていた。そこで、私はこうした各地に分布している商末周初期の青銅器を実見して紋様や鑄造方法などの具体的な特徴を明らかにし、「孝民屯」で鑄造した青銅器であるかどうかを見極めたいと考えた。多くの地方を訪れ、各地の機関においてこれらの青銅器を観察して回った結果、やはりこれらの青銅器はほとんどが西周初期のきわめて短い時間の中で鑄造されたものであり、安陽孝民屯遺跡で鑄造されたものがほとんどである、と確信するにいたった。

↓ a. 陝西省・山西省出土陝晋型青銅器と商末周初の青銅器の関係

一般的には周王朝の中心地関中平原において、商代併行期に先周文化という地方文化が発達していた、と理解されている。そして、晩商期にすでにこの地でかなり青銅器鑄造技術が発達していたとも考えられている。晩商期に平行する時期の青銅器には地域的な特徴があるとみなされるので、私は陝晋型青銅器と称してひとくくりに行っている。一方で、この地方では多数の「商末周初」青銅器も出土している。晩商期のこの陝晋型青銅器は、「商末周初」青銅器とどのような関係にあるのか。この問題は私にとっての今回の留学の大きな研究課題の柱の一つであった。研究の結果、陝晋型青銅器にはこの地域特有の多くの特徴が見られることがわかったが、その特徴は「商末周初」様式の青銅器とは共通点が少なく、よって、私は商末周初様式の青銅器は陝晋型青銅器の伝統を受けて成立したものではないと考えるに至った。以前、関中平原で多くの方格乳釘紋簋が出土したことに注目し、これは克商以前、武王が鑄造したものであり、全国に配布されたものではないかと論じた学者がいる。今回、私はこの方格乳釘紋簋に特に注意を払って観察したところ、その特徴とは同時に「商末周初」様式の青銅器が出土したときでさえ、それらの青銅器とは明らかに異なっており、やはり関中地区で鑄造されたものであろうと考えられた。しかし、その出土分布、特に形態上、紋様上の特徴の西周青銅器との継承関係から分析すると、「商末周初」様式と同時に関中地区で鑄造されたと考えるのが最も自然であろう。

c. 湖南省高砂脊青銅器の鉛同位体比測定

11月に湖南省文物考古研究所を訪れたとき、副研究員向桃初氏が長沙市郊外の高砂脊遺跡から出土した西周時代墓葬出土青銅器の鉛同位体比測定用資料を提供してくださった。そこで私はこの資料を東京国立文化財研究所の平尾良光先生に送り、測定分析をお願いした。発掘報告、ならびに向氏の直接のご教示によれば、6点のサンプルのうち1点は中原からこの地に搬入されたものであり、その他はこの地で鑄造したものであるという。分析の結果、明らかに3点が華北地区の原料を用いており、残る3点は華中地区の原料を用いていることがわかった。そして、四川地方の鉛は用いられていないことが明らかであった。その中でもAM1:18鼎は中原から搬入されたものであり、まさしく「孝民屯」様式の商末周初青銅器であった。同位体比測定の結果は原料の産地が華北地区であることを示していた。その銅質は当地で鑄造された青銅器のものとは異なっており、質がよい。一方で、AM5:53鼎の形態は中原の鼎とある程度の共通点があるが、やや小さく、その紋様は当地で製作されたことが明らかな鼎と似たところがある。すなわち、罎紋の中央に小さな点が彫りこまれるのみで(中原の罎紋は中心が円形)、また、外見上の銅質があまりよくない(銅の錆の中に白緑色の粉っぽい錆が入る)、などの特徴が見られることから、中原の青銅器を模倣して鑄造し始めた当初の青銅器であると考えられるのである。ただし、高砂脊遺跡の一つの墓のなかには新旧の型式の青銅器が含まれている。すなわち、少しずつ小さくなり、頸部に屈曲が生じて、紋様が簡略化してゆくのである。それでは、この資料の値をどのように解釈すればよいであろうか。これらの2点の青銅鼎は、錫成分があまり多くなく、よって、鑄造時の合金方法がかなり近いと考えられる。しかし、型式の上では一方が中原から搬入されたものであり、もう一方が湖南当地で中原の鼎を模倣して鑄造したものであると考えられるので、湖南省で模倣品を鑄造し始めた当初は、中原の合金方法をそのまま倣っていたと考えられるのではないだろうか。

5.結論:商末周初青銅器の鑄造工房と商周王朝

鑄型の型式から判断すると、孝民屯鑄造遺跡の年代は殷墟三期からいわゆる西周初期にかけてということになる。そして、私は殷墟の青銅器の上述のような発展状況が西周初期段階にかけて継承されていったと考える。今回、青銅器や孝民屯遺跡出土の鑄型を具体的に観察、検討して研究したことにより、こうした継承関係は次のようなストーリーのもとにおこったと推察している。殷墟三期段階に孝民屯で新しい鑄造工房が開業し、その作風はかなり斬新なものであった。武王克商以後も、孝民屯の鑄造工房はそのまま営業をしつづけ、周王は「孝民屯」様式の青銅彝器の鑄造を続け、周王が新たに任命した諸侯に分配したため、孝民屯様式の青銅器が全国に分布したのではないだろうか。



2001.12.19 河南安陽 洹北商城にて



安陽孝民屯遺跡出土 鑄型(器)